いの流水俳壇

「当季雑詠」

刈谷　志津 選

特選

咲き分けの梅の盆栽父母遠し

植田　紀子

（評）「咲き分け」とは一株に幾つかの色の花を咲かせることで、種々のカラーを楽しめて味わい深い。揚句は梅の木の盆栽で、盆栽は陶磁器等の鉢に植え、樹姿を整えて自然の風雅な趣を鑑賞するものであり、美事な盆栽として仕上げるには、かなりの日数を要すると思われる。この盆栽は、作者のお父様が趣味の一つとして作られ、最愛の娘に送ったもので、「父母遠し」の措辞により、頂いた作者が、何時もお父様のそばに寄り添っておられたお母様、今は亡きご両親の在りし日を梅の花に重ねて感慨無量。温かい親子の物語を一句に収めた。

目がね屋を出れば何時しか春の空

川村　博子

（評）人は年を重ねると、視力の衰えを感じるようになる。ちなみに八十才を過ぎると、一〇〇％の人が白内障になると言われている。「目がね屋を出れば」の措辞により、作者も視力の減退を感じたであろう。目がね屋に行き、適度な目がねを選んでもらい、早速掛けて店を出て歩いていると「何時しか春の空」最初は違和感を覚えたが、歩いているうちに何時の間にか馴染み、見上げた空は明るく、うららかな春の空であった。やはり目がねを掛けて良かった。まるで別世界、気分もルンルン、目がねの明るさを比喩で春の空と表現。巧みな取り合わせに余情を感じる。

春浅き浜辺に五色石拾ふ

村田佐代湖

（評）「春浅き」は二月になり、立春を迎えたとはいえ、まだ春色が十分に見えない頃。同じ季で早春、初春とも言うが「春浅き」特に「浅き」には近代的で初々しく、詩的感情がこもると述べる俳人もいる。「春浅き」を撰んだ作者の詩的感覚が光る。「浜辺に五色石拾ふ」の措辞より、五色石の浜辺とは、風光明媚で全国にその名を知られ有名な桂浜である。太平洋から打ち寄せる白波が浜を洗い研ぎ、そこに生まれた色とりどりの美しい五色石。拾った時の嬉しさ、持ち帰った五色石を出して見れば、桂浜の景色が眼前に広がり、波音まで聞こえる心和む一句。

入選

漬物の塩気許そう松の内　岡村　嘉夫
貝焼や入江三里の奥岬　岡村　嘉夫
戦を知らぬ古城や梅の花　大川　節弥
庭に佇つ影の固さの二月かな　大川　節弥
土佐凧やぐいぐい低くなりし海　東谷　晴男
伝言のように風花又風花　東谷　晴男
節分や闇と光の分岐点　渡邊ゆかり
引き潮や中州は葦の枯れ急ぐ　島村かりん
宇治川に初鴨並ぶ明るさよ　津田　久美
春寒し近廻りする万歩計　森岡　照月
冬苺手の平にのせなつかしむ　片岡　豊子
雲一つなき青空や冬ぬくし　平野　洋子

一句抄

愛されるために生まれし二月かな　植田　紀子
日脚伸ぶ柱時計の針の位置　東谷　晴男
旧正の消ゆる故郷となりにけり　大川　節弥
高低のリズム重たし寒雀　岡村　嘉夫
春立つ日知らずや野山は光満つ　渡邊ゆかり
雨となる裸木中華料理店　島村かりん
花も葉も日ざし集めて寒椿　片岡　豊子
赤ちゃんのまんまる笑顔日脚伸ぶ　津田　久美
白々と蕾辛夷（こぶし）の暮れなずむ　川村　博子
吹雪く中装備の固し配達夫　村田佐代湖
平成もあと三ケ月梅眞白　平野　洋子
日の射して溶けたる雪と残る雪　刈谷　志津

次題「当季雑詠」　締切／毎月1日

投句先　教育委員会事務局
いの町1700-1　☎893-1922

有料広告

内　科
外　科
小児科
循環器内科
消化器内科
リハビリテーション科
人工透析

医療法人光生会　森木病院
院長　森木光司
吾川郡いの町3674　TEL（088）893-0014